

VI 2019 年度地域密着プログラムのふりかえり

— 目次 —

1.特定非営利活動 ACT.JT 静岡支部	
「ふじのくに大田楽 -ODORIKO プロジェクト 2020-」	38
2.熱海未来音楽祭「熱海未来音楽祭」	40
3.一般社団法人 熱海怪獣映画祭「『熱海を怪獣の聖地へ』第2回熱海怪獣映画祭」	42
4.しゃぎりフェスティバル実行委員会「第3回しゃぎりフェスティバル」	44
5.静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター「七間町ハプニング4」	46
6.NPO 法人クロスメディアしまだ「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川 2020」	48
7.かけがわ茶エンナーレ実行委員会「かけがわ茶エンナーレ2020」	50
8.松崎町のうたを育てる会「FULL-SATO プロジェクト -松崎町と歌を育てる-」	52
9.MeetsbyArts@ATAMI 実行委員会	
「Meets by Arts：アートプロジェクトの『始め方』と『続け方』の学校」	54
10.Scale Laboratory	
「となりのアーティストプロジェクト ～地域を拓き、可能性の扉を開く～」	56
11.御殿場市東山旧岸邸「伝統芸能と食文化～伝統文化の継承を考える～」	58
12.富士の山ビエンナーレ実行委員会「レジデンス事業 Fujinoyama ART HUB」	60
13.企業組合くれば「WABISAVILLAGE SASAMA」	62
14.川根本町伝統文化保存会「伝統文化交流会」	64
15.一般社団法人ふじのくに文教創造ネットワーク	
「新時代の『課外活動』への挑戦！ ～地域部活・掛川未来創造部 Palette～」	66
16.原泉アートプロジェクト「原泉アートデイズ！2019～泉とともに」	68
17.ふじのくにラボ「遠州森町の舞楽・舞楽食 ～食文化～次世代に繋ぐ～」	70
18.浜松市根洗学園（社会福祉法人ひかりの園）	
「わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション～」	72
19.特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ「表現未満、プロジェクト」	74

1.特定非営利活動 ACT.JT 静岡支部

「ふじのくに大田楽 -ODORIKO プロジェクト 2020-」



■団体概要

日本の伝統的な文化芸術の活性化と振興を図り、街づくりや地域経済の活性化を目指すことを目的として設立された特定非営利活動法人ACT.JT（野村萬理事長）の静岡県における拠点として活動。慰問や各地でのイベント出演を通じ、老若男女が共に集い、地域のコミュニティづくりにもつなげている。

■2019 年度事業内容

●「ODORIKO 隊」による祝祭プレイベントの実施

2020年オリンピック・パラリンピック自転車競技開催を祝い、伊豆地域の郷土芸能と市民参加で編成した「ODORIKO 隊」による祝祭プレイベントを実施。市民参加「ODORIKO 隊」の練習は、2019年12月12日から2020年2月23日まで8日間行なった。

市民参加：番楽 30名、子獅子 10名、稚児舞 10名、二輪車・三輪車 10名、一輪車 20名、車椅子 10名、宝撒き 10名

日 時：2020年3月21日（金）※新型コロナウイルス感染症の影響により中止

会 場：長泉町ウエルピアながいずみ

●その他、各地のイベントに出演し、PR 活動を実施

2019年9月28日（土）ラグビーW杯パブリックビューイングイベントにて披露

2019年10月5日（土）長泉知徳高校峰望祭にて披露

2019年11月24日（日）長泉町産業祭にて披露

■担当コーディネーターのふりかえり

2017年度からスタートしたこの事業は「大田楽」をモチーフとしながらも、伊豆地方の様々な地域、伝統芸能が一堂に集う、出演者にとっても観客にとっても貴重な場として育っている。2017年、2018年には「伊豆地域郷土芸能現状調査」を行ったことで、「少子化」や「地域の変化」などによる地域郷土芸能への参加者の減少が浮き彫りとなった。様々な課題を持つ各地の団体にとって、他の団体との交流の場ができたことは、現状を改革するための重要な機会となっている。特に、2019年度は若手への伝承を課題にし、「長泉知徳高校」とのコラボレーションが実現した。「大田楽」を通じて、次世代へ「地域郷土芸能」を理解してもらうだけでなく、地元資源への興味を持つきっかけとなった。最終の公演を通じて実際に大田楽を体感する機会がなくなってしまったことは非常に残念であるが、新聞で取材されるなど、学生たちには刺激のある事業となったと感じている。

(門脇 幸)

2.熱海未来音楽祭「熱海未来音楽祭」



■団体概要

熱海市出身・在住の著名アーティストが中心となり立ち上げた。

■2019 年度事業内容

ジャンルに当てはまらない、どこの国のものかわからない、でもなにか魅力を感じる、心に残ってしまう、まさに未来を拓く力を持つ音楽祭を、日本を代表する歴史ある温泉観光地である熱海で開催。

即興を中心とした、世界的に活動する音楽家が集い、温泉の町・熱海のざわめきを演奏に取り込み、踊る身体に染み込ませ、未来の音楽、未来の表現をテーマに、観光で訪れた人と熱海に暮す人々が出会い、交流する場を創出する。現代と過去の入り交じる異空間・熱海の風景や、温かく懐の深い熱海の人々の魅力も、公演を通じて発見し、味わってもらおう。国境を越え、皮膚を越え、耳を越えて、世界と日本、静岡へとつながっていく、広がりのある音楽祭。

●「熱海の国のアリス」になろうワークショップ

日 時：2019 年 8 月 24 日（土）・31 日（土）

講 師：長峰麻貴

参加人数：27 名

●ストリートパフォーマンス、ライブ『詩そして電子音』『水際立つ響き』

アートパレード『熱海の国のアリス』

日 時：2019 年 9 月 20 日（金）・21 日（土）

会 場：起雲閣、熱海仲見世商店街、熱海銀座、サンビーチ、など

出 演：大熊ワタル、こぐれみわぞう、巻上公 一、佐藤正治、伊藤千枝子、 町田康、Anna Lerchbaumer 、 Andreas Zibler、 Jim O'Rourke、石橋英子

参加者数・来場者数：387 名

■担当コーディネーターのふりかえり

世界中で活躍するヴォイスパフォーマーの巻上公一氏が、拠点である熱海市で実施する「熱海未来音楽祭」。巻上氏が熱海で音楽祭を開催するのは、2019年度が初めての取り組みとなる。音楽ライブのみではなく、造形作家を招聘し帽子作りのワークショップを行うなど、地域住民の音楽祭参加を促すなどの工夫を凝らした。

本番当日は、ワークショップ参加者とミュージシャンとが一緒に、熱海駅前でのパフォーマンス、商店街のパレード、海岸でのパフォーマンスなどを行い、熱海のランドスケープを最大限に活かしながら、音楽、ダンスで街の彩りや賑わいを演出。

起雲閣を会場にしたライブパフォーマンスでは、電子音楽、即興音楽、朗読などなど、巻上氏のキャリアとネットワークを生かした内容の公演となった。国内はもとより海外でも活躍しているアーティストによる確かな音楽に、会場が一体となって聴き込む姿が印象的であった。

今回の音楽祭を行ったことで、熱海市在住アーティストが企画に積極的に参加する意思を表明するなど、今後の展開にも期待を持てることとなった。

また、巻上氏が静岡にも縁のある「大岡信賞」を受賞するなど、ますます静岡での活躍に注目を集めている。

(北本 麻理)

3.一般社団法人 熱海怪獣映画祭「『熱海を怪獣の聖地へ』第2回熱海怪獣映画祭」



■団体概要

熱海は「キングコング対ゴジラ」（1962）の最終決戦の場になり、「大巨獣ガッパ」（1967）が上陸した場として描かれている。「平成ガメラ3部作」の脚本を執筆した伊藤和典氏も熱海に在住しており、怪獣とは所縁の深い土地である。

その熱海の地で、2017年に地元の有志が集まり企画されたのが「熱海怪獣映画祭」である。伊藤氏も中心として参加しながら、地域内外のクリエイターが集まり、2018年に第1回を実施した。今後継続的に映画祭を行っていくために組織を一般社団法人化した。

■2019年度事業内容

往年の怪獣映画や新作の怪獣映画を上映、熱海に怪獣ファンを集客し「怪獣の聖地 熱海」をアピールするとともに、怪獣映画制作の人材の交流の場としての役割も担う。怪獣映画に関連したライブも実施するなど怪獣ファンのみならず地域住民にも楽しめるイベントとし、地元事業者とも協業して地域振興につなげていく。

日 時：2019年11月22日（金）～24日（日）

会 場：国際観光専門学校熱海校、芸妓見番歌舞練場、起雲閣 音楽サロン など

内 容：上映会、シンポジウム、ライブ、お絵かきコンクール、怪獣まち歩き
飲食店と連携した「怪獣映画祭コラボメニュー」 など

■担当コーディネーターのふりかえり

近年、熱海には多くの観光客が訪れ、移住者と地元の人たちが渾然と交じり合いながら、様々なアイデアを次々と具現化させていく、街としての懐の深さが活性化に結びついている。そのような意味で「地域再生」において模範的とすら感じる街である。一步路地に入れば、昭和の薫りが色濃く残り、そうしたギャップも想像力を掻き立てる。本プロジェクトはこの街に魅かれて移住してき

た芸術関係者と、もともと地元によく住む人たちが、偶然酒の席で盛り上がった話が現実化したプロジェクト、というなんとも愉快的エピソードを持つ。

実は熱海市には映画館がない。それまで残っていた唯一の映画館は現在観光専門学校の校舎に変わったが、本映画祭はその専門学校をハブとして、熱海とゆかりが深い「怪獣」をテーマに、映画上映にとどまらない、誰もが楽しめる方法を模索してきた。例えば怪獣映画「音楽」ライブ、子どものお絵かきコンクール、商店街とのタイアップによる「怪獣」メニューの開発、地元企業を中心とした協賛、商店街の中にある宿泊施設での怪獣ファンとの交流会、地元や県外からのボランティア、地元の人たちを対象とした月1回の説明会の実施など、怪獣映画ファンだけでなく、地道にあくまで地元から支援される映画祭としての姿を追求してきた。そうした姿勢も相まって、地元の人たち、移住者、外の人たちを、「怪獣映画」という、ある程度の年齢には郷愁を誘い、若い層には逆に新しさを感じるコンテンツでフラットにつないでいったのである。これがまだ2回目なのに怪獣映画ファンだけでなく、地元からの多くの来場者と熱烈な支持に結びついたのだ、と言えよう。

「熱海を怪獣の聖地へ」に向けて着実に歩み始めている。

(佐野直哉)

4.しゃぎりフェスティバル実行委員会「第3回しゃぎりフェスティバル」



■団体概要

三島市で450年続く伝統芸能「しゃぎり」を永続的に発展させるため、各町内のしゃぎり保存会が会員となり、①周囲の理解、②自己研鑽、③後継者育成の三要素を柱とした事業を行う団体。鉦（かね）、太鼓、笛を使った祭囃子である「しゃぎり」を祭りから切り離し、「しゃぎり」だけに特化したフェスティバル「しゃぎりフェスティバル」の開催が活動の中心を占める。

■2019年度事業内容

参加各町による演奏に加え、しゃぎりの衣装である浴衣のファッションショーや、しゃぎりの理解を深める講座コーナー、会場参加型で盛り上げる演出も取り入れた。開催に向けて、日本語、英語のチラシを三島駅周縁のホテルに配し観光客の取り込みにも一定以上の手ごたえがあった。当日の受付やアンケートも英語対応し、事前に準備した魅力伝達の道筋が成果をあげた。

日 時：2019年9月15日（日）13:00～20:30

会 場：三島市文化会館大ホール

参加者：766名

■担当コーディネーターのふりかえり

どれだけ見栄えのするお祭りだとしても、参加する楽しみは観客のそれとはまったく別物であろう。「しゃぎりフェスティバル実行委員会」のみなさんを見ていると、そのことを痛感させられる。とにかく本人たちが楽しそう。

残すこと、次世代につなぐこと、伝統芸能に関わる時、そうした使命感にかられることはよくある。その地域に長く伝わるもの、それはそれだけで大事なことである。しかし一方で、つなぐ人たちも社会生活を営む人間であり、いろいろなことを投げ打ってできることにも限りがある。それを残したいのは、長く続いているからなのか、先代たちもそうしてきたからなのか、自分もいいと思うからなのか、楽しいからなのか、折に触れて頭をよぎらせていいことだと思う。少なくとも

も、頭ごなしに「そういうものだから」と言っているのは、文化はつながっていかない。人の生活とともにあるものだから。

「楽しい」の体現に加えて、自分たちの大事にしているしゃぎりの要素をしっかりと分析し、無理のない企画に落とし込む。しかし毎回挑戦の要素も加え、さらに楽しむ。しゃぎりフェスティバルでは、文化を継続するための楽しむ姿勢が垣間見える。

(鈴木一郎太)

5.静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター「七間町ハプニング4」



■団体概要

静岡市が設置するクリエイターの育成、コンテンツ産業の振興を推進する拠点施設で、愛称はCCC。クリエイティブやデザインという視点で、静岡市の産業や街の活性化・発展を目指している。CCC内にあるギャラリーでは、国内外のクリエイターや、アーティストの展覧会、地域の産業の展覧会の開催や、デザイン・クリエイティブをキーワードとしたセミナーやワークショップを開催している。さらに、クリエイターのネットワークを構築し、地域の産業とのマッチング機能やビジネス相談なども行っている。

■2019年度事業内容

七間町ハプニングは市街地回遊型パフォーミングアーツ・フェスティバルである。2019年度で4回目を迎え、静岡市中心市街地（通称おまち）の七間町人宿町界限で開催している。

1950年代後半にアメリカで興ったアートムーブメント「ハプニング」は市街地などで行われ、非再現的なその場限りのパフォーマンスを指す。この身体性の伴った表現行為は、演劇や音楽を取り込みながら多様な広がりを見せた。パフォーマーと観客の境を曖昧にし、パフォーマンスに参加させることが特徴のひとつである。一回性、コラボレーション、参加というワードを参照しながら、「七間町ハプニング」は、観客にダンスや演劇、大道芸などのパフォーミングアーツと突然の出会い（ハプニング）をもたらす機会を仕掛ける。だからこそカフェや路上など劇場以外の会場も重要な公演会場となる。今回は「市民参加」を進め、ジャンルを横断した創造的身体表現をプロとアマ、出演者と観客の垣根を超えてエリア全体で繰り広げる。

七間町は明治時代には演芸の街として、大正時代は活動写真、昭和になると映画といったようにおおよそ150年に渡り舞台芸術やエンターテインメントを通して、人々に日々の活力を与えてきた。そして今、現代的で多様な身体表現「パフォーミングアーツ」がこの街のレガシーを受け継いでいく。

日 時：2020年3月14日（土）・15日（日）※新型コロナウイルス感染症の影響により中止
会 場：コミュニティホール七間町、札の辻クロスホール など

■担当コーディネーターのふりかえり

本年度はコロナ禍の中、残念ながら開催中止という判断を取らざるをえなかった。いくつかの市民協働プロジェクトは開催に向けて市民、プロのアーティストや企画者、そして七間町の人たちの間に多様な交わりとコミュニケーションのグラデュエーションを見せながら盛り上がりを見せていたところであった。

七間町ハプニング4は最後の大事な「観客」という存在のピースが欠けた結果となってしまったが、それは私たちにとって重要な問いも同時に残した。

最後の「発表の場」が失われることで、観客と「創造と協働のプロセスを共有すること」の機会が奪われるがままになっていいのだろうか？本当に最後の「発表の場」だけが発表の場なのだろうか？街を舞台にハプニング的におこなわれるからこそ、普段から街でそうした創造の共有の可能性はないのだろうか？中止の判断の渦中に主催者に生まれた問いは、新たな思考と実験として次の七間町ハプニング5に必ずや活かされるであろう。

（佐野直哉）

6.NPO 法人クロスメディアしまだ「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川 2020」



■団体概要

『スキだらけのまちづくり』をテーマに、島田市周辺で活動を行うまちづくり事業型 NPO 団体（2011 年設立）。2017 年 3 月に初開催された「無人駅アートルネッサンス～ARTCONNECTSHIMADA～」を始まりとして、第二回から「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」へ改称。大井川鐵道の無人駅およびその周辺エリアを舞台に、地域内外のアーティストと地域住民の人々の共同作業から「新しい風景」をつくりだす。

■2019 年度事業内容

4 回目（UNMANNED としては 3 回目）を迎えた芸術祭は、引き続き「無人駅が開けば地域が開く」をテーマに、無人駅 6 駅（代官町駅、神尾駅、福用駅、抜里駅、塩郷駅、駿河徳山駅）と 3 つの集落（福用エリア、抜里エリア、塩郷・久野脇エリア）を舞台に、計 17 日間開催した。

国内外で活躍する 13 組のアーティストが参加し、無人駅とそこから広がる集落の資源に焦点をあてた作品や、地域の人々と一体となった体験型の作品を展開したほか、高校生や大学生との協働プロジェクトなど多様な展開に取り組んだ。

●「集落」や「人」を見つめ、表れたアート作品

アーティストが地域の資源として、「人」を発見し、表現の軸に据えた作品が多くあった。芸術祭を中心に、アーティストや地域住民、来訪者のコミュニケーションが図られる要素となった地域意識の変革や、来訪者による地域発見につながっている。

●島田市、川根本町の 2 市町にまたがるエリアを対象とした芸術祭のあり方の検討

今年度から 2 市町の行政担当者、大井川鐵道、地元自治会やコミュニティ、静岡県による推進会議を計 4 回実施した。準備や進捗状況の共有とともに広報や来訪者管理など運営面での協議を実施した。

●ボランティアサポーターの活動

芸術祭を支える地域住民によるサポートの体制やボランティアサポーター「あんまん部」は、複数年の取組を通じ理解と期待の高まりが感じられる。地域住民によるアーティストの滞在支援、作品の制作へのサポート体制、日 時中の経路やアクセス案内や、作品の説明、自然発生的に行われる来訪者へのおもてなしなど、主体的に関わる姿勢が生まれており、地域の活性化や再生につながる取組が根付いてきている。

日 時：2020年3月6日（金）～22日（日）／17日間

会 場：大井川鐵道無人駅周辺（静岡県島田市・川根本町）

参加アーティスト：関口恒男、江頭誠、さとうりさ、木村健世、北川貴好、栗原亜也子、ニシダヒデミ、夏池篤、中村昌司、形狩り衆、クロダユキ、カトウマキ、常葉大学造形学部（計13組）

■担当コーディネーターのふりかえり

「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」は、「無人」という言葉がもつネガティブさによって見過ごされがちな集落の魅力を掘り起こし、地域内外に伝えていく芸術祭であり、この「価値転換」こそが文化芸術やアートにできることなのだと再認識させてくれる。

今回は、新型コロナウイルス感染症拡大による影響で、イベントはすべて中止とする異例の事態となったが、対策を万全にした上でアーティストの制作活動は予定通り行った。まちづくりに取り組む主催者が最も大事にしている「集落の人々の営み」を、参加アーティストも各に感じ取り、表現活動の糧にしている。

住民からは「アーティストという生き方を支えることができる地域を、自分たちでつくってきたということ。これまで自分たちがやってきたことは間違っていなかったと感ずることができて嬉しい」との声があり、本事業が人々の地域に対する誇りにつながっていることを感じた。

このように、芸術祭を支える人々さらには来場者が、アーティストや作品のその先に、自らの地域を見つめ直すとき、「UNMANNED」としての価値が最大限開花するのだと思う。

（立石沙織）

7.かけがわ茶エンナーレ実行委員会「かけがわ茶エンナーレ2020」



■団体概要

地域資源である「茶・茶産地」と「アート」を融合させ、地域の魅力を再発見することを目的に3年に1度、地域芸術祭を開催。2回目となる「茶エンナーレ2020」に向け、みんなの思いを形にするまちづくり芸術祭を目指し、文化振興だけでなく観光、商業、茶産業など、多岐にわたる分野が参画した実行委員会。

■2019年度事業内容

2015年度から2017年度にかけて3年間（千日）をかけて推進された茶文化創造千日プロジェクトとして、2017年に第1回を開催。山口裕美氏を総合プロデューサーとし、総勢約90名のアーティストが参加した。

2019年度は、翌年に控えた第二回の本展開催に向けて、基本方針や企画内容の検討・調整を行うとともに、市民の茶エンナーレに対する理解促進と機運醸成を目的としたプログラムやプロモーション活動等に力を入れて取り組んだ。

●キックオフイベント：オチャノキプロジェクト「オチャノハ」贈呈式 & 緑茶で乾杯

日 時：2019年4月23日（金）11:00～11:30

会 場：掛川市役所前広場

内 容：茶樹作品の寄贈、テープカット、掛川茶で乾杯

●令和記念イベント：オチャノキプロジェクト

「茶縁結び企画 vol.1 オチャノキに『純愛』の花を咲かせよう！」

日 時：2019年5月1日（水・祝）9:00～16:00

会 場：掛川市役所前広場

内 容：お茶の花カードに思いを書いて結ぶ 写真撮影・プレゼント

●市民プログラム 2019

2017年から継続的に取り組んでいる市民プログラムは、応募数が年々増加しているほか、市民とアーティストの協働の機会も生まれている。

公募期間：2019年5月17日（土）～21日（火）

実施期間：2019年9～12月

実施数：11プログラム

●ラグビーワールドカップ 2019：静岡大会「茶文化」でおもてなしイベント

日時：2019年9月28日（土）10:00～16:00

会場：掛川城公園三の丸広場

内容：市民プログラム 2019 など 14事業を実施

●天浜線「茶エンナーレ号」出発式

日時：2019年11月28日（木）10:00～10:30

会場：天竜浜名湖鉄道掛川駅

内容：テープカット ラッピング列車「茶エンナーレ号」の毎日運行

●「掛川おべんとう画用紙」説明会&プレ展示

日時：2020年2月14日（金）～28日（金）

会場：掛川市役所 3階テラス

内容：根洗学園松本園長による趣旨説明と展示会

■担当コーディネーターのふりかえり

3年に1回のトリエンナーレ形式で開催している「かけがわ茶エンナーレ」。第1回（2017年度）の目的と成果である《文化の起爆・覚醒、「茶縁の種まき・芽生え」》を踏まえ、第2回（2020年度）の目的を《市民の思いを形にする、「茶縁を育み広げる」》とし、活動している。

2019年度は、各分野を代表する市民で組織する実行委員会によって、産業（茶産業含む）、観光、教育、福祉など、市内の現状を多面的にとらえながら、計画策定を進めてきた。また、市民プログラムの団体に対して企画内容や収支がステップアップできるよう事務局が細やかなサポートを行なうなど、市民と文化芸術の距離が少しでも近づくような取り組みに注力していることが茶エンナーレの特徴の一つである。

茶エンナーレのゴールは芸術祭を開催することではない。茶エンナーレで培ったネットワークを同芸術祭の開催以後にどうつなげていくかということを常に意識しながら市内全体で本展を盛り上げていくことに期待している。

（立石沙織）

8.松崎町のうたを育てる会「FULL-SATO プロジェクト –松崎町と歌を育てる–」



■団体概要

声楽家や音楽家、大学教員らからなる外部団体との活動に触発され、地元有志で立ち上げた団体。外部団体と共に実施するプロジェクトの地元の受け皿となる一方、プロジェクト成果を地元浸透させていくための周知・調整・盛り立て・拡散を自発的に行い、将来の展望を開いていく。

■2019 年度事業内容

●コンサート「松崎町のうた ～町民が紡ぐ歌語り～」開催

町内で活動する音楽団体、活動団体、FULL-SATO プロジェクトの音楽家たちが出演するコンサートが開催された。観客も、出演者もそのほとんどが松崎町の住民だったが、その数は人口の1割となる660名を数えた。その数もさることながら、それぞれに作詞した歌の歌唱には誇りや気持ちが表れており、歌い手・聞き手の区別なく心動かされた空気感が感じられた。

日時：2019年12月15日（日）14:00～15:35（13:30開場）

会場：松崎町農村環境改善センター 文化ホール

参加者：660名（観客：470名、町民出演者：190名）

●周知活動

町内のさまざまな場面に出掛けていき、幅広い層に向けた周知活動と、作詞のワークショップを実施。それぞれの町に対する思いをつづった歌詞が100篇ほどできあがった。

- A. ミニコンサート 全4回 のべ131名
- B. 歌唱練習会・作詞ワークショップ 全13回 のべ540名
- C. 各地の敬老会に赴いての歌唱披露 全7地区 16会場のべ285名
- D. 地域の学校での演奏会・歌唱指導 小、中、特別支援学校 のべ402名
- E. 町内のイベントへ出演 全4回 のべ460名
- F. コンサート映像鑑賞会 47名

●プロモーションビデオ制作ワークショップ

松崎高校美術部と町民有志 のべ60名

■担当コーディネーターのふりかえり

外部から立ち上げられたプロジェクトに刺激を受け、地元から生まれた「松崎町のうたを育てる会」。「こうして立ち上げられたものを町に根付かせるのは自分たちの責任だし、自分たちしかできないだろう」とメンバーの方が言っていたのが印象に残っている。外からの働きかけをきっかけに、自分たちの強みを見つけ、誇りを持って団体を立ち上げ運営していく姿にはいつも感激する。コンサート会場には全町民の10分の1にあたる600名を超える人たちが集まっていた。こうした文化活動は外への発信や、外部からの来訪者数、どんな波及効果があったかなどに注目が集まりがちだが、しかし、町の中で町民がやっていることに町民たちがのっかって楽しむ、土地ならではの文化を語る時には、これがまず何より大切なことだと感じさせてくれる。

(鈴木一郎太)

9.MeetsbyArts@ATAMI 実行委員会

「Meets by Arts：アートプロジェクトの『始め方』と『続け方』の学校」



■団体概要

2018年度に開催した「アーツプロジェクトスクール@ATAMI ART FAIR」の受講生と現地コーディネーターが結成した団体。

熱海市のまちを舞台に、アートプロジェクトの企画立案を学ぶ短期集中型のスクールを実施。アートの意義を「異なる価値観や視点を持った表現に出会う機会の創出」と捉え、熱海がアートのある多様で寛容なまちとなることを目指す。

■2019年度事業内容

アートプロジェクトを手がける際に重要な「始め方＝地域のリサーチ」と「続け方＝企画の振り返り」に特化した独自のカリキュラムを立て、計3回の合宿（企画立案の演習）を行った。より具体的な事例で実践的に学ぶ工夫として、熱海で実際に行われているアートプロジェクトや受講生による持ち込み企画をテーマに設定した。現場の第一線で活躍している熊谷薫氏と平井宏典氏をメンターとし、事務局とともに伴走支援を行うことで、充実したサポート体制を組んだ。受講生による3企画は、2月に最終発表会＆シンポジウムにてプレゼンテーションが行われた。

日 時：

合宿① 2019年12月14日（土）～15日（日）

オリエンテーション、持ち込み企画の提案、レクチャー、懇親会、ほか

合宿② 2019年12月16日～2020年1月31日（チームごとに1～2日間で設定）

リサーチ

合宿③ 2020年2月1日（土）～2日（日）

グループワーク、中間発表、最終プレゼン、シンポジウム

メンター：

熊谷薫 氏（事業評価コーディネーター/アートマネージャー）

平井宏典 氏（和光大学 経済経営学部経営学科 准教授 / 真鶴まちなーれ総合ディレクター）

レクチャー・講師（12月15日）

永田雅之氏（一般社団法人 熱海怪獣映画祭代表理事/映像ディレクター）

シンポジウム・ゲスト（2月2日）

芹沢高志氏（都市・地域計画家 / アートディレクター / P3 art and environment 統括ディレクター）

加藤種男氏（静岡県文化プログラム チーフ・オペレーティング・ディレクター）

参加者数 スクール受講者数：12名

シンポジウム参加者数：38名

■担当コーディネーターのふりかえり

Meets by Arts が考えるアートの役割とは、「異なる価値観や視点と出会う機会を創出すること」。アートが地域に根付くことによって、観光だけに頼らない新しい地域資源を発掘する可能性を持っているという考えが根底にある。

他のプログラムに比べて参加者は小規模ながら、地域内外から集まった12名の受講生がチームごとに熱海やアートについて喧々諤々議論する中には、地域の人々は見過ごしているかもしれない熱海の魅力がたくさん詰まっていると感じる。

人材育成事業は長期的な視点が不可欠である。ここで生まれた「種」がどのように受講生個々人の中で「発芽」するかは、スクール事業自体がはじまったばかりの今は、まだあまり見えていないかもしれない。しかしながら、本スクールがコツコツと継続されていくことで、ここ熱海を自身の活動フィールドとして捉えられる人を一人でも多く生み出し、熱海に関わる人とプロジェクトが多様化していく可能性に期待している。

（立石沙織）

10.Scale Laboratory

「となりのアーティストプロジェクト ～地域を拓き、可能性の扉を開く～」



■団体概要

県東部在住の創造産業に関わるプロフェッショナルを中心メンバーとする団体。伊豆半島各地の空き店舗等の遊休施設を「劇場」として活用する舞台公演等を通じて鑑賞機会を創出するとともに、地域の新しい風景として定着させ、発信力、誘引力を強める。さらに、文化・芸術活動に従事する人材の育成、ネットワーク化を図り、プロの人材が活躍できる環境の実現を目指す。

■2019 年度事業内容

●スケラボ アートサーカス

観る人によっては初めての体験となるような作品を毎年発表することにより県東部地域住民の「少し足りない刺激」を提供しつつ、観客の感じたこともトークや歓談でキャッチし、アートの楽しさや魅力を「一緒に」作り上げるスタイルに年々地域からの理解や協力が蓄積され成果をあげている。

2019 年度は、赤ちゃんから大人まで楽しめるパフォーマンスイベント「空中音楽会」を実施。音楽家が企画した「for Babies」「for Kids」は、おとぎの国のような空間で子どもの反応に奏者と保護者がコミュニケーションを取りながら、一体感を持って「音」の魅力を味わう機会となった。「for Adults」は、民俗音楽をベースにしたダンスミュージックに最後は盆踊り状態になるなど、電子音楽と映像で空間全体をクールな夜に演出。パフォーマンスに関わるスタイルに始めは戸惑い気味だった観客も、好奇心が刺激され最後は充実した時間に満足した様子。

日 時：2019 年 12 月 20 日（金）～22 日（日）

会 場：沼津ラクーン 来場者数 120 名

出 演：SUN DRUM、松岡大、林文彦、飯田将茂、鈴木彩、原順子、サノユカシ（映像）

●スケラボ アートキャラバン

地域の方々との連携を密にしたアウトリーチ活動は、アートによる人づくり、地域づくりの良いモデルとなっていると同時に、スケラボ の新たな看板メニューともなっている。

2019年度は、子どもたちに広い視野を持ち、ユニークな体験をして欲しいという保育園のリクエストに応じ、巻上氏を講師に「へんてこ音楽会」を実施。障がい児童放課後デイサービスには「色んな人と接して欲しい」という希望から、スケラボメンバーやゲストアーティストによる、映像、カフェ、造形などのワークショップを実施。高校演劇部では、コンテンポラリーダンスワークショップを実施。普段から演技レッスンを重ねている生徒たちも、身体全体を使った表現にのびのびと参加し和やかで活発なワークとなった。

会 場：ぽんぽん保育園、エシカファーム、県立静岡城北高校演劇部、県立伊東高校演劇部 等

講 師：磯村拓也、AKICHI コーヒー、中村一平、長井江里奈、巻上公一

参加者：141名

■担当コーディネーターのふりかえり

ブンプロのスタートとほぼ同時に活動を開始した「ScaleLaboratory (スケラボ)」。共に歩んできたコーディネーターとして、この機にこれまでの活動を振り返ってみたい。

ブンプロの軸となるテーマ「地域（社会）課題との対応」とは、少々上滑り気味に見られていたスケラボのプロジェクト。沼津市、三島市を中心とした県東部での活動を続けて行く中で、見事に「課題」に対応したプログラムを運営する団体へと変わっていった。

実は課題であったのは、「アートが足りない」地域であったことであり、「足りない」ことを顕在化させたのが、スケラボの活動による成果である。この逆順的な課題との関わり合いは、アートが持つ力として期待されている「可能性」や「効果」を、活動を続けることで示してこられたと考えている。

アートは課題を直接解決する術ではない。課題を顕在化させ、その課題に向き合い、思考を重ねるきっかけ作りとして、アートが有効な手段の一つだと考えている。スケラボは手法として「対話と演出」を取り入れ、巡り巡って地域の方々との課題に向き合うスタイルを築き上げた。

このスタイルに共感した方々が、スケラボのスタッフとして加わったり、運営のサポーターとなったり、プロジェクトを依頼したりと、共感の波紋が広がっている。スケラボの活動を通して、身近にアートを体験できる環境となった東部地域では、「足りない」から「魅力ある」へと変化し、心が満たされた人が増えてきていると聞いている。 今後も、逆順的にアートの可能性を追求して行くであろうスケラボの活動に、注目していただきたいと思う。

(北本麻理)

11.御殿場市東山旧岸邸「伝統芸能と食文化～伝統文化の継承を考える～」



■団体概要

東山旧岸邸は、首相を務めた岸信介の自邸として1969年に建てられた。その後、30年程の時を経て、2003年に御殿場市に寄贈されたあと、一般公開された。2009年からは、和菓子の虎屋のグループ会社である株式会社虎玄が指定管理者として管理運営を行なっている。建築家・吉田五十八の晩年の作品である邸宅は、施主・岸信介の生活に配慮しつつ、伝統的な数寄屋建築の美と、現代的な住まいとしての機能の両立を目指して設計された。

■2019年度事業内容

2019年度の伝統芸能講座は「伝統芸能と食文化」と題して開催した。とらや工房では茶懐石「温石」店主・杉山氏がつくる静岡の食材を活かした点心を提供し、東山旧岸邸では改元を祝して、元宮内庁式部職楽部首席楽長による解説とともに、慶事に演奏される雅楽を披露した。分野や様式が違っていても共通する「こころ」や「かたち」に触れ、日本の伝統文化について考えるひと時となった。

日 時：2019年10月8日（火）昼の部 12:00～15:00／夜の部 18:00～21:00

会 場：点心席 とらや工房 / 雅楽演奏会 東山旧岸邸

定 員：各回60名 事前予約制 ※先着順

参加費：昼の部 6,500円（税込）満席／夜の部 7,000円（税込）満席

■担当コーディネーターのふりかえり

地域に残る重要な文化資源を保存しながら、いかに活用していくか。伝統芸能がこれまで脈々と受け継がれてきている一つの理由は、文化芸術に宿る大切な価値を守りながら、時代性に合わせて柔軟に変化し、社会と上手く付き合う「したたかさ」と「強さ」である。そのような意味で、東山旧岸邸の取り組みは今後の文化施設運営と指定管理者の在り方を考える良いきっかけとなったプロジ

ェクトである。指定管理者として、これまで受け継がれてきた地元の文化資源を調査・研究しつつ、地域の声や社会の文脈を取り入れ、「今を生きる文化施設」として意欲的に数々の企画を発信し続けている。

本企画「伝統芸能と食文化～伝統文化の継承を考える～」では、地元の茶懐石「温石」店主・杉山氏が作る静岡県の食材を活かした点心に、敷地内にある「とらや工房」の創作和菓子を組み合わせ、令和の始まりに相応しい雅楽の演奏と解説と共に提供した。さらに杉山氏、とらや工房の職人・高田氏ら本企画関係者による「伝統文化の継承」を考えるトークも実施した。本イベントは食材の現場視察や地元生産者との密接なコミュニケーションを通して、協働で作り上げていくプロセスを丁寧に踏んだ上での実施であった。そうした交流によって、食文化における地域資源の発掘に結びついたことが成果である。本イベントをきっかけに、一過性のイベントで終わらない伝統芸能と地域の接続の形や、「文化継承」を今度は参加者や地域の人たちと共に考えていく場の設定など、今後の持続的な企画と発展が期待される。

(佐野直哉)

12.富士の山ビエンナーレ実行委員会「レジデンス事業 Fujinoyama ART HUB」



■団体概要

富士市、富士宮市、静岡市の地元有志が立ち上げた団体で、2014年から隔年で「富士の山ビエンナーレ」を開催している。他地域でのアートプロジェクトによる成果や効果に触発され、富士市を中心とした地域に、芸術を取り入れた創造産業振興や人材育成を目的としたビエンナーレを実施し、地域資源の再開発と他地域とのネットワーキングを企て、富士地域から新しい価値を掘り出し、発信することを狙う。

■2019年度事業内容

2020年のビエンナーレ開催に向け事業体制を構築するとともに、富士本町商店街にあるイケダビルを利用して行われるマイクロレジデンスプログラムで、2019年は3名のアーティストが富士本町商店街を舞台にアート活動を行なった。

アニメーションを使った作品を発表する Kawa a.k.a. Sushijojo 氏は、イケダビルの3階で作品を発表。滞在中は、富士本町商店街を中心に富士市民へのリサーチやワークショップを行い、参加者の詩作が作品でも用いられた。

インスタレーションを発表した吉野祥太郎氏は、富士市の地形や自然にも関心を示し、市街地以外でもリサーチを展開。作品はイケダビルの一室に、富士山のシルエットが浮かびあがる幻想的な空間を作り上げた。

音を用いた作品を発表している西原尚氏は、共同プロジェクトとして市民参加のパフォーマンスを発表。数回のレクチャーを行い、現代音楽の歴史や手法を学ぶ機会を設けた。パレードでは各参加者の背負ったスピーカーから、音の重なりと響きが商店街を往来する非日常の空間を作り上げた。

会 場：イケダビル

滞在アーティスト：吉野祥太郎、Kawa a.k.a. Sushijojo、西原尚

参加者数：377名

■担当コーディネーターのふりかえり

隔年で「富士の山ビエンナーレ」を実施している富士の山ビエンナーレ実行委員会は、地域で繰り広げる現代美術の芸術祭の振興と、芸術への理解促進、地域住民との交流を目的に「Fujinoyama ART HUB」を2019年度に実施した。

公募で選ばれたレジデンスアーティストは、富士市を中心に滞在しながらリサーチと作品制作と作品の発表を行った。アニメーション、造形美術、音楽と、アーツジャンルは多岐に渡り、制作スタイルも各作家の個性が垣間見える方法で行われた。どの作品にも地域住民のアイデアや感性が取り込まれ、生き生きとした富士エリアの営みが、作品を通して伝わってくるように感じ取ることができた。

レジデンスとなった富士駅前の「イケダビル」は、商店街の中にあるビルで現在は空き店舗となっている。作品制作と発表を行うアーティストが商店街や地域の活性化の媒介となることを願い、実行委員会が試行錯誤のもと手作り感覚で実施されたレジデンス事業。

作家とのコミュニケーションや地域でのネットワーキングなど、これからの運営に向け取り組むべき課題はまだまだ残されているが、「地域で作り上げる芸術祭」への再構築にむけ、新たな第一歩を踏み出すこととなった。

(北本麻理)

13.企業組合くれば「WABISAVILLAGE SASAMA」



■団体概要

旧笹間小学校を活用した宿泊体験施設「島田市山村都市交流センター」の指定管理者。過疎の村にある様々なものを、視点を変えることで、地域資源として活用し、日本古来の「わび、さび」のように質素で静かなものの中に美しさを見出していく。2011年から2年に一度開催している「ささま国際陶芸祭」の企画を中心にし、海外からの訪問者を迎えつつ、地域の良さを再発見していく。

■2019年度事業内容

●「WABISAVILLAGE SASAMA ー暮らしの中のアート展ー」の開催

暮らしとアートがどのように交わることが出来るのかをテーマに、3つのグループに分かれ展示を行った。展示会場には2007年に廃校となった旧笹間中学校を利用し、「廃校」という負の遺産の活用法への提言の一つとなることを目指した。

- ・スウェーデン人陶芸家グループ KAOLIN より12名の陶芸家が、地域の基幹産業の茶業で使用する茶箱を利用した展示
- ・6名の日本人アーティストが、イケアジャパンより寄贈された家具を活用して装飾した空間への作品展示
- ・スウェーデンと長年交流がある北海道・当別町へのヒアリング等を元にした紹介展示

日 時：2019年11月3日（日）・4日（月）

会 場：旧笹間中学校館内

参加者：鑑賞者2,800人

●シンポジウム「ラゴムに学ぶ、ちょうどいいライフ+アート」の開催

ゲストパネリストに陶芸家道川省三氏、ピアニスト牧村英里子氏を、ファシリテーターに国立大学法人静岡大学人文社会科学部客員教授平野雅彦氏を迎え、過疎地域でも実践できる幸福的な暮らし方を考えるシンポジウムを開催した。

日 時：2019年12月7日（土）

会 場：静岡大学 静岡キャンパス学生会館

参加者：45人

●WABISAVILLAGE SASAMA コンセプトブック制作

笹間の日常をテーマに、WABISAVILLAGE SASAMA のプロジェクトで目指すものを写真・文章にて発信することを目指して、コンセプトブックを作成した。

日 時：2020年3月末

ページ数：48ページ

印刷部数：700部

■担当コーディネーターのふりかえり

この企画の最大の良さは、笹間に移住してきた方々が中心となっている事だ。笹間の地域資源をひとつひとつ丁寧に見つけ、特に地域の年長者の皆さんの「日常」がどんなに「素敵」なのか、長年地域に暮らしている住民へ伝えている。暮らしの中のアート展は「第五回ささま国際陶芸祭」のなかで行ったことで、日本に止まらず海外からのお客様にも大勢来場いただいた。地元のお母さんたちによる手作りの食事は笹間の魅力をより一層引き立ててくれた。

また、WABISAVILLAGESASAMA コンセプトブックは「笹間」を国内外に発信するツールとして大活躍してくれるだろう。「小さな集落」ではあるが、「大きな可能性」を感じる事業であった。

(門脇幸)

14.川根本町伝統文化保存会「伝統文化交流会」



■団体概要

赤石太鼓保存会を中心とした町内の伝統文化団体により結成された組織。2019年3月に建設された伝統文化伝承館「時愛（ときあ）」の活用の創出を行うため、同年結成。「時愛」を情報発信拠点として活用し、交流会、ワークショップを開催し、後継者不足解消や失われつつある文化の再興、隆起を目指していく。新たな時代に向けての伝統文化を伝承するとともに芸術の域に高めるよう、文化意識の向上を図るための活動を行なっていく。

■2019年度事業内容

●ワークショップ

町内の伝統文化芸能団体の問題点をワークショップ形式により明確化した。

日 時：2019年7月13日（土）

会 場：伝統文化伝承館～時愛～

参加者：

梅津神楽保存会2人、田代神楽保存会1人、徳山古典芸能保存会3人、赤石太鼓保存会2人、川根本町文化協会3人、千年の学校9人、一般参加者2人

●「伝統文化交流会」公演会及び交流会の開催

町内外の伝統文化団体を一同に介し発表公演を行った。

日 時：2019年9月7日（土）

会 場：伝統文化伝承館～時愛～

参加団体：

はいばら太鼓、井川神楽、徳山神楽、金谷大井川川越太鼓、赤石太鼓、笹間神楽、徳山の盆踊り、梅津神楽

参加者：約600人（鑑賞者、出演者含む）

■担当コーディネーターのふりかえり

太鼓や神楽、盆踊りなど川根本町では多数の伝統芸能があるなか、団体の存続については、他の地域と同様に少子化や人口減少によって厳しい状況である。では一体どうすれば良いのかについて考えるためのワークショップは、漠然としていた問題点を明確にすることができたのではないだろうか。

それぞれの団体の悩みを共有することで、地域での伝統芸能の必要性を参加者が改めて感じ、考える貴重な時間となった。伝統芸能をしている人だけでなく、次世代の若者へ芸能の歴史的背景なども含めて「伝える」ことは、地域を理解し地域の「資源」を再認識できるツールになり得るのだ。団体だけの問題ではなく広く地域住民と共に「伝統芸能」を守っていくというスタート地点に立った1年となった。

(門脇幸)

15.一般社団法人ふじのくに文教創造ネットワーク

「新時代の『課外活動』への挑戦！ ～地域部活・掛川未来創造部 Palette～」



■団体概要

静岡県を拠点に、音楽芸術を中心とした文化教育事業の創造・発信を通して、生涯学習環境の創造を目指し、2010年に設置した地域ネットワーク。(2020年に解散し、新NPO法人を設立予定)
家庭の経済状況に関わらず子どもが多様な文化・芸術体験を積むことができるようにするため、継続的、分野横断的な課外活動として中高校生を対象とする総合文化系「地域部活」を創設。産業界による支援や、成長した体験者の運営参画等による長期的な運営モデルの確立を目指す。

1. 文化部活動の選択肢の拡大
2. 豊かな感性、寛容な心、人間力を重視した子どもたちの学びの場の提供
3. 地域文化活動の担い手の輩出

■2019年度事業内容

●部活動の開催：100回

音楽、演劇、ダンスをはじめとする部活動を実施し、それらを通して学んだことを生かしながら、部員自らがイベントなどの企画、運営、制作を行った。部活動には講師として専門家が入ることもあり、表現方法を伝えること、また鑑賞プログラムや移動教室なども取り入れた。2020年2月から一か所に集まっていた活動ができなくなったが、ZOOMを使用した「テレ部活」をスタートし、より幅広い活動方法を部員全員でチャレンジした。

部員数：掛川市内5中学校より20名が入部

主な活動場所：掛川市美感ホール

※2020年2月末～3月末迄の計12回の活動は、学校の臨時休業に伴い部活動も休止

●イベントへの出演

掛川周辺で行われる外部イベントへの出演を積極的に参加した。表現をするパフォーマンスだけでなく、脚本、演出、なども部員が行い、またプロも含むステージと一緒に立つ貴重な経験をした。

- ・ふじのくにユニバーサルミュージックフェスティバル in Kakegawa2019

日 時：2019年7月14日（日）

会 場：掛川市美感ホール

- ・ラグビーワールドカップ 静岡県文化プログラム スペシャルコラボステージ 出演

日 時：2019年9月28日（土）

会 場：エコパ周辺おもてなしエリア（JR 愛野駅前）

●主催事業（主なもの）

- ・創作劇「遠州報徳と我が故郷」上演

日 時：2019年10月27日（日）14:00 開演

会 場：大日本報徳社 大講堂前広場（野外上演）

- ・小学校6年生対象 部活体験&説明会（計3回）

日 時：2020年2月

会 場：掛川市美感ホール

鑑賞者数（公演などの観客、お客様）：1,367名 ※主催行事のみ

関係者数（部員およびスタッフ出席者数）：2,000名 ※計100回の延べ人数、実数 各20名

■担当コーディネーターのふりかえり

スタートした2018年度は、主に各分野の講師が入って活動していたが、2019年度は本来の部活動の姿である、生徒主体の体制が整った1年であった。特に1年生が入ったことで、2年生の責任感のめばえや、それぞれが得意な分野で力を発揮することで、部活動としての連帯感も強くなった。10月に行われた創作劇「遠州報徳と我が故郷」上演では、生徒が脚本を書き、出演しての芝居、音響、その他を分担して屋外で披露した。地元の資産である「報徳」と掛川を題材にした演劇は、詰めかけた多くの地元の大人達の心を打ち、涙する人たちがいっぱいとなった。生徒にとっても、改めて自身の住んでいる掛川を見つめ直す機会となり、普段接する機会のない方々との貴重な時間の共有となったことで、部活動の方向性が改めて明確になった瞬間となったと感じた。地域の方々にとっても文化系地域部活がどのような活動なのかを理解してもらうこととなった。

（門脇幸）

16.原泉アートプロジェクト「原泉アートデイズ！2019～泉とともに」



■団体概要

掛川市北部の中山間地域である原泉地区にアトリエを構え制作活動をする作家とともに、現代アートを軸にした地域づくりを進める任意団体。

「原泉アートデイズ！」は、原泉地区でアーティスト・イン・レジデンスを開き、滞在したアーティストたちの制作のプロセスから展示作品の発表までを総称した、様々なアーティストによる「作品展示とパフォーマンス」、作品や各種グッズを販売する「アートストア」、アーティストと触れ合い学ぶ「イベント&ワークショップ」からなる複合的な現代アートイベントである。

■2019年度事業内容

2019年度は10月に開催したメインイベントの他に、9月にプレイベントとして「使われなくなった茶工場で観る NIGHT THEATER」や、毎月1回の食堂イベントなど、年間を通じて活動することで、地域のプロジェクトへの理解促進に力を入れた。

メインイベントでは国内外のアーティスト10組が参加し、原泉地区での滞在制作をベースに、絵画、彫刻、インスタレーション、映像、演劇、パフォーマンスなど多様な作品を発表した。展示にあたっては、旧茶工場、旧JA、旧駄菓子屋など地区内の空き施設や空き家を地域資源の一つとして捉え、積極的に活用することで地域振興にもつなげている。

日 時：2019年10月24日（木）～11月10日（日）10:00～16:00（火・水休業）

会 場：掛川市原泉地区全域

観覧料：自由（投げ銭式）

■担当コーディネーターのふりかえり

「原泉アートデイス！」はアーティスト・イン・レジデンスをベースとし、アーティストが一定期間原泉地区に滞在することで、ディレクターや運営メンバーとの議論を重ねながら作品制作したり、地域の人や自然と関わり合ったりすることを徹底して行なっている。これにより、参加するアーティストには、自身が地域とどのように関係していくかについて深い意識が生まれ、作品としての強度も上がっているのだと感じる。その成果として、ここで制作された作品が現代アートのコンペティションで大賞を受賞した。

また、空き施設を活用した成果として同団体以外の活用が始まったり、建物の持ち主を通じて若年層のサポーターが生まれたりするなど、会場の変化だけでなくその会場にまつわる人の変化も見ることができた。本プロジェクトの面白みが着実に地域の人々に浸透してきているからこそではないか。

本プロジェクトの最大の特徴として、自らの手で持続可能なプロジェクトを作り出そうとする姿があげられる。助成金等の既存制度を活かしつつも、自分たちの最適な運営のあり方を見出すため、ドネーション（投げ銭）とアートストア運営に力を入れ、原泉地区の魅力を感じた人がプロジェクトのファンとして関わるができる、関係人口の創出を目指している。

（立石沙織）

17.ふじのくにラボ「遠州森町の舞楽・舞楽食 ～食文化～次世代に繋ぐ～」



■団体概要

地域に紐づいた和食文化を次世代へ継承することを目的とし、伝統芸能及び土地の風習・風俗に付随する食文化の調査・再現・アレンジなどを実施する料理人3人で構成する団体。

■2019年度事業内容

舞楽奉納の際に食べられていた食事を「舞楽食」と名付け、遠州森町を対象に、文献や地元住民、有識者への取材を行い、舞楽食の再現を試みた。再現した舞楽食を披露するとともに、今後の継承について考えるワークショップを開催した。

- 第1部 知ってみよう森町の舞楽の世界 小國神社舞楽「色香」の舞 解説・実演
田鍬智志氏（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）
北島恵介氏（森町教育委員会社会教育課技監）
白幡富幸氏（遠江国一宮小國神社古式舞楽保存会）

- 第2部 時代を経て遠州森町の舞楽食
 - ・寛政年間の舞楽食再現・舞楽食試食・座談会
 - ・講演 食文化～次世代に繋ぐ～ 高島知佐子氏（静岡文化芸術大学准教授）

日 時：2019年11月18日（月）18:00～20:40

会 場：静岡文化芸術大学 食堂

参加者：100名

■担当コーディネーターのふりかえり

「舞楽食」は団体によってつくられた造語である。

しかし改めて考えてみたら、かなりの時間をかけて舞を奉納するのだからお腹も空く。そしてその食事は神様の前で食べるものになるわけだし、そこになんらかの考えやしきたりや特徴があってもおかしくない。輸送手段が限られていた頃では、その地で手に入る物で調理するわけで、誰が何も言わずとも地産地消となるし、毎年定期開催されることで子ども達にとっては、旬を知ることにもつながることかも知れない。

まだスタートしたばかりであるが、料理人たちがそこに目を向け、ただの調査ではなく、現代の状況やニーズに合わせた形をつくりだすスタンスに期待している。

(鈴木一郎太)

18.浜松市根洗学園（社会福祉法人ひかりの園）

「わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション～」



■団体概要

発達にゆっくりさがみられる幼児期の子どもの療育施設で、アーティストとのプログラムを通じて、施設職員の創造的取組、家族との関わりを活性化を図りながら、療育の場へのアートの導入効果を考察し、他の施設でも適用可能な手引書を作成する。具体的には、「おべんとう画用紙プロジェクト」「ワークショップシリーズ」「アーティストインレジデンス」等を通して施設での経験を外部に発信し、共有を図る。

■2019年度事業内容

アーティストの持つまなざしや技術と、療育現場の相性のよさに着目しプログラムを展開。2019年度は、プログラム毎の対象をはっきりとすることで、それぞれのプログラムを今後先鋭化させる糸口をつくろうというねらいを設定。

●アーティスト・イン・レジデンス

療育現場内での滞在から着想を得て、現場の人たちと共に作品を作り上げるプログラム。演劇家の柏木陽さんを迎え、2パターンの映像作品をつくった。

ひとつは、現場の先生達が日頃子ども達とのやりとりの中で何げなく使っている技に着目した映像集だ。療育のみならず保育の現場との親和性も高い内容であり、過酷さが取り上げられることの多い保育現場に向けてエールを送るような意味合いも読み取れる。外部に公開できるよう、ドキュメンタリー形式ではなく、俳優を用いて撮影をした。

もうひとつは、滞在期間を通じて一人の子を追いつけ、その子の変化、周囲の関わりなどをまとめたドキュメンタリー的な長編映像だ。こちらはプライバシーの関係で公開ができないことを前提に、映像の位置づけを学園内でのコミュニケーションツールとしての使用を想定していた。

●子育て中のおかあさん向けワークショップ「ゆるゆるしてみる2」

コミュニケーションの幅広さを楽しく体感するシリーズ。母親達が少しだけ日常を離れ心や体をリラックスさせながら、日頃様々な方法で感情を表す子どもたちとやりとりする時の幅を広げるヒントをつかむことをねらいとしている。

川口淳一（作業療法士、勇輝病院リハビリテーション部作業療法科科长）参加／7名 託児参加／5名

柏木陽（NPO 法人演劇百貨店代表、演劇家）参加／8名 託児参加／5名

砂連尾理（振付家、ダンサー）参加／8名 託児参加／5名

片岡祐介（音楽家）参加／8名 託児参加／5名

●親子音楽ワークショップ

音を介したコミュニケーションや、その中で起こる様々な気付きを促す親子対象の音楽ワークショップ。複数家族が同時に参加し楽しむ「みんなで」と、ひと家族ごとに音楽家とセッションする「しっぽり」の2パターンをそれぞれ3回ずつ実施。ワークショップへの参加はしり込みする家族のためにコンサートも開催した。

講師：片岡祐介（音楽家）

ワークショップ参加者：のべ31家族

コンサート参加者：43名

■担当コーディネーターのふりかえり

発達がゆっくりな子どもに寄り添い、発達を促す支援をするのが療育施設の仕事である。子どもはそれぞれに違いがあり、親や家族の状態もそれぞれに違う。こうした状況を支えるために福祉制度の整備と専門性に富んだ実践が行われている。そのように整えられた専門性に対して、少し素朴で根源的なアプローチをしようとしているのが根洗学園の取組ではないかと思っている。

ダンス、音楽、演劇の専門性を取り入れ、そこから療育・保育現場との親和性や共通項を見つけ出し、福祉の専門性をより効果的に活かせる状況をつくろうとしていると感じる。福祉の業界には身体機能の専門家として作業療法士・理学療法士がいるが、ダンサーも身体の専門家である。身体を使って表現すること、そのために身体に意識を向けること、周囲の空間と身体の関係性を考えること、それらは日頃の生活の中で無意識にしていることでもあるが、意識的に試みることで発見することがあるのではないかと、というのが根洗学園の問いかけだ。

文化芸術は人間の営みの中にある様々な物事を駆使して表現をつくりだす。丁寧に探れば、それらと社会のいろいろな分野や場面との接点や親和性が見つかるはず。そこで見つかるアプローチは普段それぞれの所でやられていることとは別角度のアプローチかもしれないが、だからこそその発見や気付きにつながるはずである。最近では対象をしぼった取り組みが目立つ根洗学園の事業であるが、今後も注目していきたいと思う。

（鈴木一郎太）

19.特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ「表現未満、プロジェクト」



■団体概要

2000年に設立された認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ（以下、「レッツ」）は、現在、静岡県浜松市の中心市街地に「たけし文化センター連尺町」として拠点を構える。障がい福祉施設でありながら、地域の文化創造発信拠点となることを目指し、「障がいや国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがい」を乗り越えて、人間が本来もっている「生きる力」「自分を表現する力」を見つけていく場を提供し、全ての人々が互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会づくりをおこなう団体である。

■2019年度事業内容

レッツは、「表現未満、プロジェクト」の一環として、「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン！！」を実施している。

2019年度は、「表現未満、」文化祭のオープニングを飾るイベントとして、「たけし文化センター連尺町」にて3回目を開催し、1階から3階まで建物全体を使い、6時間に及ぶステージを繰り広げた。出演者だけでなく審査員も公募し、芸術家や音楽家、福祉施設職員などの7人が審査を行なった。

障がい者施設でもある建物を会場とすることにより、「表現未満、」の意味と、人の持つ表現の可能性と多様性を示す試みであった。

日 時：2019年11月3日（日）13:00～19:00

会 場：たけし文化センター連尺町

参加者：250名、全国映像配信視聴者数1,500名

■担当コーディネーターのふりかえり

2000年の設立から一貫してソーシャルインクルージョンを目指して活動しているクリエイティブサポートレッツは、お互いに尊重していこうとする文化活動「表現未満、プロジェクト」をブンプロと共に2016年から育ててきた。その活動は平成29年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を代表の久保田翠さんが受賞するまでに注目を集め、アートが社会福祉、地域包括、社会包摂などの分野の構造を変えられることを世の中に示すまでになった。2019年度は「表現未満、プロジェクト」の中から、「表現未満、」な音楽パフォーマンスを全国から公募形式で集めた「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン3～」をブンプロではサポートした。

通常、福祉施設への訪問者は限定的だが、障がい者施設で文化事業を行うことで、多様な他者との出会いを生み出している。それは「知らない」ことによる差別を防ぐのみならず、訪問者に他者を通じて自己を見つめる機会や、ありのままの存在を肯定する「場づくり」を提供している。「表現未満、は利用者に宿る創造性を文化として肯定する試み」である。それは同時に訪問者自身にとっての創造性や主体性を生み出す装置にもなっているのである。

(佐野直哉)